

成長の約束とその手段・道筋の明示を 長期的な協力関係の出発点に

大学選びにおける「もう一つの指標」を確立するために、大学は、保護者の意識変化の兆しを捉えて働き掛け、より大きな変化をつくり出す必要がある。

多様な評価指標と 当事者発のリアルな情報

保護者が多層化し、その意識、発想に変化が起きている。例えば、高学歴化が進み、自身の大学や大学院での経験がさまざまな判断に影響するようになった。そして、職を持ち職業人の視点からもわが子の将来を考える母親が増加。子育てや教育に積極的に関わる父親も増えている。

一方、保護者の目に触れる大学の情報も、メディア、量、内容や質などの面で大きく変化している。従来は大学発の公式情報がほとんどだったところへ、新聞や週刊誌が盛んに大学特集を組むようになった。それらは、大学には入試難易度以外にもさまざまな評価指標があることを示し、保護者は、きめ細かい教育体制や就職支援、学費・奨学金などで大学を比較するという視点を持つようになった。

他方、ソーシャルメディアでは、学生、保護者、教職員といった各大学の当事者が生の情報を発信し、大学のリアルな姿を知らしめている。

マスメディアとソーシャルメディアは、他大学との違いがわからない内容を抽象的な言葉で説明する大学発の情報以上に、影響力を持ち始めた。

こうした変化にもかかわらず、最終的には入試難易度を最大のよりどころとする保護者の意識はいまだ根強い。多様なメディアによる多様な情報も、保護者の気持ちに突き刺さる決定的な力をまだ持っていないということなの

かもしれない。

高校生にとって最も身近な大人である保護者の意識を変えなければ、大学選びは変わらない。今後、保護者が自身の大学での経験を社会生活の中でより自覚的に検証しながらわが子の将来を考えるようになれば、大学を見る目は確実に変わっていくだろう。そこに刺激を与えて意識的な「経験の検証」と気づきを促すことが、大学選びを变えるために大学がすべきことだ。

成長、自立、幸福が 大学と保護者共通の目標

変化の兆しはある。座談会に登場した2人の母親は、入試難易度というあらがいがたい既存の価値観を前に思い悩む時間を経て、最終的には「わが子に合うか」というオリジナルの基準で大学を選んだ。生き生きと学生生活を送るわが子の姿に確かな成長を実感する中で、自分たちの選択を肯定し、大学に感謝しているという。

彼女たちの10年後を思わせる保護者の声も聞いた。入試難易度、知名度共にさほど高くないある小規模私立大学の後援会で、わが子が卒業して10年余の今も学園祭などを手伝うという父親は、こう話す。「息子は希望どおりの職に就き、家庭も築いた。この大学で成長できたおかげだと思う。私自身の母校以上に愛着があるし、その良さを多くの人に知ってほしい」。

わが子が成長して自立し、自らの手で幸せをつかみ取る。これこそが、保

護者にとってのあらゆる選択と意思決定の出発点である。そして、成長、自立、幸福は、まさに大学の人材育成のゴールでもあるはずだ。

どのような手だてと道筋によってそのゴールに導くのかという大学の理念と方針に保護者が共感し、わが子に薦め、高校生と大学がお互いを選び合う。そんな関係を、大学は丁寧につくっていく必要がある。座談会の2人の母親は、必ずしも大学選びの段階でこの共感に至ったわけではなく、入学後に発見することも多かったようだ。

大学がすべきは、どのような教育の手法とプロセスによってどのような成長を約束するか、明瞭な言葉で説明することだろう。在学生の保護者の体験と評価が、その裏付けとなる。「大学だけではできないこと」も伝え、「一緒に育てていく」という意識を持つパートナーとしての関係を築くことが重要だ。これらは、マスメディアでもソーシャルメディアでもなく、大学が自らの言葉で語るしかない。

「こんな成長をしてほしい」という思いでわが子にその大学を薦めた保護者は、自らの役割も果たしつつ、大学が約束を果たすかどうか注視し続ける。期待どおりの教育がなされれば満足感や喜びを誰かに伝えたいし、教育をさらに良くするためにずっと大学を応援したいと考えるだろう。

入学前から卒業後までも続く大学と保護者との相互理解と協働が、大学選びの基準を徐々に変え、その大学の新たな価値をも創り出すはずだ。